昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十年六月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第七卷　第六號
（通第七十五号）

目次

あゆみの跡……臼杵祖山…（1）
如来出世の本意……花田正夫…（2）
へだてのやまぬものをこそ……聚墨生…（6）
歌心そのをり〳〵……柳瀬留治…（10）

あゆみの跡

臼杵祖山

年を送り、歳を迎へても、また、風につけ、雨につけても、尊まれ、ただ〳〵仏恩のみに御座候。

世の中のことは、苦は苦にからめられて、ます〳〵苦に沈み、楽は楽にしばられて、いよ〳〵楽に耽り、苦楽ともに我が身心を繋縛いたし候。萬事みな〳〵このならひに候

然るにただ独り、如来の御慈悲のみ、世の盛衰栄枯、人の苦楽昇沈、何につけても尊く道味いたされ候。

苦を捨てて後に出でくる楽に候へば、その苦を捨つることに不可能なる我等は、いかで楽といふことの真実に味はれ申すべき。とても〳〵覚束なき儀に御座候。苦をそのままに捨てずして、一切を攝取したまへる御慈悲のほど尊重に候。

正も偏すれば僻となり、邪も通ずれば中となる、吾我の執なきを要となす。

吾我の執封を離れたる正は、古今を論ぜず通ぜざることなく、東西を問はず達せざることなし。古へに居して今に通じ、今に在りて古へに達す。東にありて西に通じ、西に居して東に達す。正中の道は、古今を超へ東西を絶す。

古今東西は、時代の変遷あり、思想の変化あり、知識の明昧あり、理想の高下あり、人種の相違あり。これ等の一切を貫通して、しかも融会するものは、中正普徧の一道なり。

……

豊前の築上郡に、仁平同行あり。常念仏の行者であつたが、「聞ききらん、聞ききらん、聞きかけたまでじや」と八十の老人が常に語つてゐた。

釈尊の「百千萬劫不能窮尽」と同味なり。

註、臼杵先生個人雑誌「自照」転載

如來出世の本意

花田正夫

極く最近に、盛岡市新穀町の池野藤兵衛翁から、蓮如上人の四百五十回忌記念に施本として出版せられた「上人御病床御物語」を頂きました。その本に、池野家蔵の蓮如上人御筆の大福の軸の写真が挿入してありました。そこに

如来世に興出したまふ所以は
唯弥陀の本願を説かんとなり
五濁悪時の群生海
応に如来如実の言を信ずべし

と上人の雄渾な筆勢で、墨痕あざやかに、正信偈の四句が書かれてあります。

実を申しますと、私はここ数年来、蓮師のこの御軸を拝みたくて〳〵ならなかつたのであります。それには次の二つのことが私の心を強く動かして居たからであります。

菅瀬先生の讃仰

丁度敗戦の直後、名古屋全市が戦災の惨禍に打ちのめされて居りました頃、広い名古屋に法縁が殆んど無い頃でありましたが、名古屋の西別院の僅かに焼け残つた幼稚園の講堂で、白井先生から次のことを承りました。

それは何十年も前のことで、白井先生がまだ東大の研究室に居られた頃のことでありました。御同郷の恩師、島地大等先生の御孫様が亡くなられたので、白井先生は御友達と共に御悔みに行かれ、御遺骨のお伴をして御仏壇にまつられたばかりの時とて、大奥様も若奥様も御仏前に涙にくれていられました。そこへ菅瀬芳英先生が矢張り弔問せられたさうであります。そして御遺骨の前に泣き崩れていらつしやる奥様方をじつと眺められながら、しきりに念仏申されてゐたが、

「泣きなされ！泣きなされ！可愛いい子ぢやもの孫ぢやもの。どんなにか悲しからう、どんなにか切なからう。今となつては涙がせめてもの心遣りにならう……。心行くまで泣きなされ……。

然しなあ、つれないことを言ふやうぢやが、われわれの涙は何時か渇く時が来る。ただ久遠の親様の涙は渇く暇がない。どうか今の涙をとほして久遠の仏の涙を仰いで念仏申しませう……。

念仏するといへば、すぐ自力とか他力とか理屈を云ふけれど、それはこちらの思ひであつて、念仏はすつかりのおあたえものぢや……。」

と徹底した御慰問をせられ、今度は、白井先生とお友達に向きなほられて、丁度その時床に掛けられてあつた、池野家所蔵と同様な蓮師の掛軸を指されて

「如来出世の本懐が、唯弥陀の本願を説かんがためであつた。してみれば我々が人として生れた本意は、唯聴弥陀仏本願にある。弥陀の本願を聴くにある。

あなた方は大学で種々学問していられるが、本願を聞かない学問はおそろしい学問になる。このことをよく聞いて研究すれば生きた学問となる……　。」

といふ意味のことを申されて、そのまゝ菅瀬先生は辞去せられたが、その時の菅瀬先生の印象が胸に深く刻まれ、人生の帰趣とでも云ふものを指示されたと白井先生は微笑の中に述懐せられました。

常音先生の讃歎

終戦後の或秋、近角常音先生が、滋賀県愛知郡稲村の善照寺に行かれました時、同寺に、矢張り蓮師の同文の御軸があり、先生はその前に端坐せられて、随喜讃仰のあまり感涙までとどめあえなかつた御由であります。

それと申しますのも、敗戦後の日本に、一筋の念仏の白道をお辿り下さる先生の胸に、如来所以興出世　唯説弥陀本願海　五濁悪時群生海　応信如来如実言　の正信渇の四句の渇文が非常に心を打ち、常に讃歎し謁仰して居られたのでありますが、たま〳〵そのことを蓮如上人が御同様に感銘随喜せられて、斯くも末代にまで書き残されていられるのを発見せられて、何だか先生の胸に去来される聖語にはからずも蓮師も同調であつたことをお知りになり、言ふにいへぬ嬉しさ、有難さであつたと、奥様に繰り返して申された由であります。それで奥様も一度善照寺参りをして御軸を拝したいものですと述懐して居られました。

我聞如是

斯うしたいきさつから、数年来、かね〳〵拝みたい〳〵と願つて居りました蓮師の御軸をはからずも今度池野翁の御好意によつて拝見させて頂き、ひそかに先生方や、上人様の思し召しを一層深く強く感銘させて頂きました。

如来所以興出世　唯説弥陀本願海
五濁悪時群生海　応信如来如実言

玲朗玉の如き金言、唯誦しまつり誦しまつるばかりで、徒らに手を下しやうのない、傷無き玉に傷をつけることを恐れるばかりであります。

惟ふに聖人の九十年の御生涯は「顕真実、々々々」に明け暮れなされて、広大無辺の仏の御真実に照され給うては虚仮なる全自我を放下せられて居り、そこに仏のまことがおのづと顧現してゐるのを拝するのであります。

そして諸仏如来出世の本懐を、唯説弥陀本願海、と感佩せられる聖人はまた

「弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思し召し立ちける本願のかたぢけなさよ」

と常に御述懐なされて居られます。これが正信偈の四句の偈文そのままの御信嘗であります。

その聖人の本懐を蓮師はまた随喜渇仰せられて、単刀直入に、この四句の偈文を随時随所でしたためられて有縁の人々に頒たれたのであります。我々もこの思し召しを身に深く頂かねばなりません。

さて脚下を省顧いたしますのに、煩悩具足の我等が、無限の欲求に動かされて、而も有限の世界に右往左往してゐるのでありますから、何処まで行つても、何時まで経つても、これで満足といふ時が来ようはづはありません。そして身に持つ種々な夢が消えて不幸に落ちると、自分はどうしてこんなに不幸なのであらうかと、自分を一番不幸者と思つて、周囲の人々は幸福である、よしんば幸福でないまでも自分よりは上等であると思ひこむのでありますが、それは身勝手な妄想であります。「酔へばこそ楽しいのだ。醒めてのあとの味気なさ」と叫んだ哲人もあります。

パスカルの人間観の中に「人は現在居る場所が何時もつまらなく見えて、自分に無いものを満たすところに幸福があると思ひ込んでゐるが、それが自分の手に入るともうつまらなくなる。さういふことを繰り返しながらちつともそれをそれとさとれないで、性こりもなく死ぬまであへぎ求めて行く。そこに人間の本当の不幸がある。」と言つて居ります。

私もその最も愚鈍な者でありますから、到る処に愁歎の声を放ちながら、人生の旅を続けるのであります。かうした人生に処して行く我々は、ともすれば生活の目標を失ひクタクタに崩折れた下からまた何かの夢を持つてそれに夢中になつて行く。それは仰ぎ見る大空にむく〳〵と湧き上り、また崩れ行く雲の峰にも似た、まどはしの人の世を旅する者の姿であります。これが五濁悪時の群生海の姿であ

り、そくばくの業をもちける我身の姿であります。

是処に聖人ましまして

「如来諸仏の出世の本懐は、ただ弥陀の本願海を説かんとなり」

と直指して下さり

「五濁悪時の群生海、まさに如来如実のみことを信ずべし」

と切々として悲引して下さるのであります。この仰せひとつに、横ざまに、生老病死の四流を超断させて頂くのであります。不治の病を身に持つた者が、不治のままに、即ち横ざまに超断させて頂くのであります。この大悲ましますことによつて死刑囚は死刑囚のなりに救済せられるのであります。氷は冷たく物を凍らせますが、如何に大きな氷塊でも、太陽を冷却するものはありません。弥陀の本願は私共の病苦のありつたけといふより、むしろ病苦にあへぐ身ぐるみをおさめとつて下さるのであります。何時までたつても、何処までも、死にたうもない、別れたうもない、煩悩の興盛な者と離れ給はず、その切ない心、恩愛のきづなを、ことに憐れと思し召される大悲大願であります。

さうでありますから、不治の病気を持ちながら、なさけないことぢや、淋しいことぢやと思ふ私と同喜同憂して下さる阿弥陀仏であり、身から出た錆で、のがれられぬ宿業死にたくても死にもならず、生きたくても生きもならぬ身、一分一匪どうにもならぬ者を、その深いところを洞察しつくされての大悲であります。

かうした本願の広大なみむねを、釈迦諸仏の慈悲から、然もそれを出世の本懐として御教へ頂き、念仏させて頂くまでにおそだて下さつたことは、そこに身は如何様な姿であるとしても、人として世に生れ出た本意が成就せられるのであります。

横川の法語の中に源信僧都は

「まづ三悪道を離れて人間に生るること大きなるよろこびなり。身は賤しくとも畜生に劣らんや、家は貧しくとも餓鬼に勝るべし、心におもふことかなはずとも地獄の苦にくらぶべからず、世の住み憂きは厭ふたよりなり。このゆゑに人間に生れたることを喜ぶべし云々」

と、人間に生れたることのよろこびを、ここに見出して居られます。これこそ、人としての無上の幸福と申されるのであります。

へだてのやまぬものをこそ

聚墨生

私が京都で池山先生から「継母（ままはは）」といふ題の小説をお聞きして、もうかれこれ三十年近くなりますが、何故かその小説の印象が深く心の底に刻まれてゐて、何かの折に触れては、時に濃く、時に淡く想ひ出されるのであります。

その小説は一つの心理描写を中心とした短篇ものでありますが、各種の婦人団体の幹部の人々の切なる懇望にこたへて、独逸の或る有名な作家が執筆したものであります。それといふのも「ままはは」といふ名を聞いただけでも、そこに冷酷で意地の悪い中年の婦人を世間では想像するけれども、母を亡くし、或は母と別れた子供達のために、深く遠い縁の糸に結ばれて、新しく母の座につく婦人が、継母といふ名のもとに、最初から、然も、誰からも、さうした意地悪い色眼鏡で視られることは、余りにも残酷であり気の毒であるといふ、さうした点に深い同情を寄せた方々の熱望に促されて、継母といふ位置の難渋な立場と、血の滲じむ辛労の一端を描写して、四方八方から吹いて来る世間の冷い風を防ぎ、且つは無理解から来る嫌悪の感情を寛和し、せめても「継母」といふ言葉にまつはる陰影だけでも払拭したいといふ願ひのもとに執筆されたものであります。

さてその小説の概要を記憶の糸でつないで述べましよう

○

父母の家にあつて、あまり世間の深刻な風浪にも遭はないで成長した娘さんが、不思議な縁に結ばれて、娘の座から一足とびに母の座につかされるのでありますが、それまでには長い思案をとつおひつ重ね抜くことでありましようさうした末に、理解ある主人の被護を唯一の力とたのんでやうやくに、母を亡くした子供達のために捨身の努力を捧げようと、堅く深い覚悟をきめるのであります。それは恰も、道なき世界に道を伝へようとする殉教者の涙にも通ふ

ものがあります。

斯うして、心に物に、内に外に、あらゆる準備もととのひ、新家庭の主婦の座につくと同時に、主人から子供達を引き渡される。

『A夫もB子もここにお座り、そして新しいお母さんにお挨拶なさい』

と。然し父の口から『お母さん』といふ言葉を聞く子供達には、すぐに亡き母の像が浮び上つて来る。それなのに父の指す母なる人は、今日初めて見るただの婦人でしかない。そこに子供の胸に満たされようのない淋しさが宿る。そして、斯の様な暗さは子供達をヂット其座に落ち着かせないで、程なく姿を何処かへ消してしまふ。

これが非常な決心で出発した新しい母が遭遇せねばならぬ最初の幻滅の悲哀である。

『今日からは、あなた達の……』

と温い手を延ばすと、母の無い淋しい子達は、スグにもふところに飛びこんで来るだらうと、それとなく期待してゐた美しい夢が冷厳な現実の風に吹き飛ばされるのであります。

然し新しい母はすぐに思ひかへして、最初から、まだすこしも努力をしないのに子達が親しむ筈はない、いよ〳〵これから……と、崩折れる心をひきしめて、近い將来にはきつと『お母さん！』と、満腔の信頼をもつて慕ひ寄る日まで、飽くまでも堪え忍んで行かうと、心の緒をかためるのであります。

さて斯うした新しい母の昼夜不断の努力、それは恰も、愛の巣を黙々として織りなして行く蜘蛛の如くであります。然しその愛の糸を無惨にもプツプツと切断する人々がある。母と子との間に水をさしてやまぬ手があります。

このことは私共が強く深く反省しなければならぬことであります。新しい母と子供達を取りまく四囲の人達は、別に悪意でするのではなく、一寸した好奇心と、無反省な同情心から、

『今度のお母さんは、すき、きらひ？』

『坊や、この着物をこんなに破つて、お母さんは縫つてくれないの』

等々と、相手変れど主変らずで、四囲の人々から同じ子供に、意地悪い質問を何度となく繰り返す。

さうしてゐるうちに、長い家庭の生活では、時に子供を叱らねばならぬ場合もある、たしなめねばならぬ時も来るものである。たま〳〵さうした時、子供が涙にぬれて恨みごとを外でもらすとか、叱り声と泣き声が近所の人々の耳にすこしでも入ると、待つて居ましたとばかり「矢っ張り

ね！」と、目と目で合図をしながら、あることないことを尾ヒレをつけて囁き合ひ、それが内密々々で、伝はり伝つて、子と母との間をズタ〳〵に裂き、多年の苦労を微塵に紛砕して行く結果になるのであります。

——夏目漱石の書いたものの中に、蛙が子供に物申すところがある。それは池のほとりに集つた子供達が面白半分に池に浮ぶ蛙目がけて石を投げて嬉々としてゐる時『坊ちやん悪戯はお止し！坊ちやん方には遊び半分でも私共には生命がけですから』と云ふ一節がここでも思ひ合されるのであります——。

然し幾度砕かれても、いくら崩れても、黙々として新しい母の涙ぐましい努力は、冷たい眼光を背後に常に感じながらも、営々といそしむ働蜂の如く長時不断に続けられる。それはさうでありますけれど人間の力には限度があり、遂には、精根がつきて了ふ時が来る。そして身を幾度か退かうとさへ思ひつめますが、その都度に、主人やら肉親やら知友に種々と慰められ励まされ力づけられて、どうにか、かうにか母の座にとどまるけれども、心中は空虚で涸渇したものになつて行く。

然し斯の母の心の陰影は子供の心に敏感に反映せずにはをらない。そして子供の心に宿る暗影はまた類反射して母に帰つてくるのであります。このやうな種々のいきさつから、不完全な人間同志の間に出来上る復写真といふものはいびつで、ゴツゴツとした醜悪なものが出来るのであります。恰もそれは、満潮の時に「春の海や終日のたり〳〵かな」とおだやかであつたものが、干潮ともなつて、海浜の黒いゴツゴツとした岩石が露出し、あちらにもこちらにもゴミゴミとした海底の藻屑と泥沼の地肌があらはにされる姿にも譬へられる。

これに反して「産みの親より育での親」と言ふやうに、子供の心に宿る亡き母の影像が段々と色褪せて、新しい母の真像で埋めつくされて、子供の心を満ち足らはせる場合もあるにはあるが、これは條件の非常に惠まれた場合に限られてゐるやうであります。また長年うまく行つてゐる様な場合でも、父が死んで遺産の分配をするといふ様な時になつて、今迄の綺麗ごとが根底から崩れ去るといふことも往々聞くところであります。そこでたとへ表面的な融和でも種々の條件のもとに達成されるためには、聰明で不偏な父なる人の理解と無限の督励と、母なる人の超人的な精進と、不死身の忍耐が必須條件となる。云々。

○

大略このやうなことを中心にして、不幸な座にある新しい母なる人への世間の理解と同情を促した小説と云ふよりも随想でありますが、最後に必須條件として提出せられた

超人的努力と、無限の理解と督励といふものを、有限で不完全な人間に要求することは余りにも惨酷すぎることであります。それかといつて、そんなこと出来ないことだといふのであれば暗黒であり自滅であります。

斯の絶望の淵にたたずむ母に、その底の知れない悲歎をよく知つて、自分の力の限りは慰め励ます主人も、無限に流れ出てやまぬ泥水に対して、何の力ともなり得ないと云ふ自己の限界に到達する時、今度は可哀想なのは自分自身となり、遂に主人も絶望の淵に引き入れられて了ふ。

また子供達は子供達でこの光の無い家に育てられて、身も心も冷え〳〵として、僅かに子供同志が身をすり寄せて暖を取らねばならぬといふ痛ましい破目におちこむことになるのであります。

斯くては、光のちつともない、はてしない曠野を、冷い風に吹き曝らされて、夫々の重荷を背負うて、一人一人が孤独の旅を続けるばかりであります。ここには「自分の力をもととした聖道の慈悲」は全く塞ざされて了ふのであります。残るものは「あゝもしたに、かうもしたに」といふ愚痴と相手の無理解を責め冷酷さを呪ふといふ始末になるここに、始めは慈愛の心で相手を完全に融かさうとし、それが出来るかに思つてゐたことが、大きなうぬぼれで、凡夫のくせをしながら仏様の真似をやらうとしてゐたことが知らされ、あゝもした、かうもした、といふ、我善なりの心が崩折れて見れば、その始めに善と思つたのは僞善に過ぎなかつた、虚仮であつた、独善であつたと照し出されるのであります。

昔舌切雀の婆さんの話を私共は皆聞かされて居りますが雀から貰つた大きなつづらを開けて見ると、怪物やら、大蛇やら、汚物が飛び出して、欲深婆さんも腰を抜かしたといふのも、ひとごとでなく、現に我身の成れの果てであると知らされるのであります。

噫このへだてごころのやまぬもの、その故に一切は崩壊し、暗黒と修羅と孤独のとこしへの亡びの道に陥ち入るほかに無いものにこそ、

「ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべし」

との如来の本願がまします。

「ただ」とはそのこと一つ、他にならぶことをきらふ、即ち、三千世界の何処にも私共の救ひの道の絶えて無い者だがら、〃ただ〃と呼ばれるのであります。

縱令一生造悪の　衆生引接のためにとて

称我名字と願じつつ　若不生者と誓ひたり

一生造悪の外ない、全く浮ぶ瀬の無い者に「称我名字」と仏智徹見の大悲から、ただ念仏しておくれよと、悲心切々と願じて下さり、「若不生者」と金剛不壞の誓ひをもつて悲引して下さるのであります。

墓ひ寄る　蝶をもたほす毒草に
なほさしそうか　天つ日のかけ

読人不知

歌心そのをり〳〵

柳瀬留治

其顰に效ふ

世のつまらぬ流行をまねるをさとすに「效ッ二其顰ニ一」といふ語を今も使はれてゐる。これは支那の故事である。支那の春秋時代に、越国の西施といふ絶世の美人、それが呉王の夫差の寵姫となつてゐた。美はしい西施は久しく胸を病み、常にその柳眉を顰めてゐた。そこで当時は醜い婦達もそれを真似てしかめ面をすることがはやり、自ら美人気取りをしたといふ。

立派なパリ式のニューファッションなら兎も角、変な流行をそこらに見受ける。形の上の新しがり屋は目を外に向け勝ちで、殊に若い世代の人、殊に女性の方に烈しい様である。文化は模倣から発するといはれ、幼児など大人の模倣による〇〇ゴッコといつたものが遊びの過半を占めてゐる。創造に至らない幼稚な段階には著しい。美はしい西施が眉をひそめるさまは却つて美であつたらう。それを醜婦達が真似た形は思ひ半ばに至る。

美も醜も半ば宿命的なもので、己に徹してそれより解脱することが大切である。容姿は心の表れとなり、その人為

如何により変貌する。世間に美人ながらつんとしてゐて鼻につゐて厭になるのがある。これに反しよくないが沁々した深さがあり気高い品、香気をもつた人があり、心床しく思はしめる、誠に内なるものが然らしめるのだと思はれる

私など老人で流行に心は動かぬが、晴がましい物を身に着けると、甚だしく心に空虚を感じる。私自身の心を見る時、底の底まで、泥の如き醜いもののみでうんざりする。洗つても自我中心の泥以外何物もない、これには永い間苦悶した。泥の己が哀れ愛しく自暴自棄になれず、何とかせねばならぬのが苦悶だつた。

容姿の美も醜も心を掘出し取り上げた時、等しく始末の打てぬ泥たるに気付くであらう。これが己の真の姿で、ここが宗教に徹し、又芸術の発する軸である。

この己の泥が本当に判ることも、泥の始末をして呉れる救ひ、それが為に、絶えず注がれる清水に触れ、手放しの己になつて初めて真の泥になりきれるのだ。

芸術に於て求める己の表現といつても、その底を突いた己の実体が掴まれ、人類の、社会の実体が掴まれぬと本物が出て来ない。夢の己、偽りの己、明滅しふら〳〵する幻影の己を追ひかけ、それを相手にしてゐては金輪際はてしがない。泥の己が幻を追つて泥海に藻掻き、或は世の泥、己の泥の、泥試合をするに終る。果ては処理がつかず仕舞ひである。

泥の始末がつくことによつて、己の泥、世の泥に対し、泥は泥として嘆くことも・又いぢくり合ひ・詮議立てをし、周囲を汚し迷惑をかけることもなくなる。

一生己の幻影に引きずり廻され、又うわべなる流行に引廻されるは、己の実体を掴み、己の基盤に立つてゐないが為である。これは服飾生活に止まらず、人生生活に於て然りである。現前の問題として、歌壇の新味といふものに、日本文学として奇異な流行を多分に孕んでゐる。それに魅せられると否もかかる所にあることと思ふのである

短歌草原、昭和卅年二月号、冠頭言。

冴えと貫き

冴えた色は確に目を奪ひ、冴えた音は耳を傾けしめる。濁みた色、だみた声は人の魂に響く所がすくない。これは張りとか高揚といつたもののない為だと思はれる。低い声でも内蔵せる張つたもの、深いものをもつ場合は澄んで魂に響く、私はこれも冴えと云つてゐる。

これは魂にさうしたものを持つてゐて、それが事にふれ物にふれて、目の冴えとなり言葉の冴えとなつて表れる事と思はれる。

西欧では詩人はよく世の先達として時代の求める所を代

つて声に発し・民衆の先頭に立つて・時代を率ゐるといふ。それは澄んだ魂を以て世を徹見する直観力によるものだと思はれる。

扨てその澄むといひ、冴えを持つといふ資質は何うして得られるものか、これは天才的資質に基くものか、さうだとすると凡愚には至り得ぬ事となる。それとも習熟によるものか。天才と雖も習熟を怠つての天才はないといふ。実質なき累積は質の上に於ては矢張り低い訳である。ここで私の云ひたいことは高い見地を得るにあるといふことである。哲学で「個は全である」といふ。全を掴むといふことは六ケ敷い事で、それは天才的直観力によらねばならぬかも知れぬ。だが個に徹することにより全に通じ得る。凡愚としては凡愚に徹することにある。「知らざるを知らずとす、これ知れるなり」といひ、聖人親鸞も自ら愚禿といつた様に、我に徹し・己を掴むの話は・一切群生の魂に響き、衆の持つ缺陥を余すことなく掴んでゐるからである。即ち個の真実を掴む、それが全を掴むこととなる。個は全の延長だなどいはずもこの一事でわかる。この己を知つた境、己を掴んだ見地から物を見ると「多即一」で極めて単純である。統一があり、貫きがあり、高さがあり、冴えが発して来る。ここに於て「一以て貫く」といふことになり、物を見るに、行を行ふに極めて安く楽なことになる。樹木でも枝が野放図だと繁雑であり、伸びを失し、冴えを失ふと同様、我々作歌に於ても然りである、況んや人生生活に於いては猶更である。

作歌の上で「素裸になれ」といふ。口ではいふが真の素裸にはなり難い。なつたと思つてもどこかに未だ偽が残つてゐる。これに反して所謂露出症の様に曝け出した醜さ丈では真実はない。冴えは真実の現れである。一己に徹するとは素裸の己を知ることで、その響き、その冴えが高い立体性、気品となり、又あまねく万人に拡がる普遍性となつて響く、それが空間的のみならず時間的に永遠性をもつて千年の未来の人々にも響く。私はさうした歌を自らにも、諸君にも希ふわけである。

口の中でぶつ〳〵いふは濁みてゐて響かない。冴えは統一され単純化された澄み且つ張りを持つ為、万人に響き、古今を貫くのである。この冴えも貫きも、作者自身のそれの表れたることを銘記して欲しい。

方法技術として、或程度なし得るが、それには限度がある、己の心自体向上はなし得ない。才を弄してなしたものは不自然で生命性のない、造り物でしかない。従つて味ひがなく、人の魂に触れ得ない

短歌草原、昭和三十年三月号、冠頭言。

顔

「顔は人間の看板ですよ。お店の看板の様に」

「この人は誰か、どこを見れば判るんです？」

と保育園の子供達に聞くと――「顔だ」といふ。その顔を毎朝洗つて来ない子があるので「にやんこさへ顔を洗ふでせう」といつて、毎朝洗はせるんです。

私は不思議に「顔」はその人を表してゐることを感じ、人の顔に興味をもち、よく眺める。その癖に直ぐ人の顔忘れをする。視力の悪いせいもあらうが、若い婦人の顔、覚へて置くべき必要のある人の顔をよく見ないらしい。恐らくテレ気味なんだらうと思ふ。困るのは園兒達の母親の顔を忘れて始終とんちんかんをやる。それを友人の画家に話した所、「スケッチしないからですよ」と言ふ。成程その特徴を目にスケッチするんだなと判つた。だがそれが出来ない。絵の下手な為かも知れない。かかはりのない人の顔を見てゐるのが逆も面白い。電車の中で読書が悪いので目をつむつてゐるか、何か考へてゐるか、でない時は人の顔々を眺めてゐる。張切つた意欲的な顔だの、小皺をもつた事々に貫きのない顔、表皮の敏く動く世渡りの器用らしい顔・それから鼻が低くせせつこましくくしやづいた顔・手斧で造つた様な荒削りな顔、大きく深く皺の喰い入つた顔、これは條を立てて物の中心を深く極める人であらう。私は無愛想で取付きの悪さうな渋面が一番好きで、又吃度話が合ふ。女の人達はそれぞれ相応に顔に自信があるらしい。毎朝電車で見る、座間キャンプに通ふ幾人かの若い女性の中に、やや美人だと思ふ人がゐる。本人も大層それが御自慢と見えて、同僚との話の調子、表情、休のこなしなどに気取りが見られる。常に私は美人は不幸だとつくづく思ふ。それは美に煩はされ虜はれるからである。美人であつてそれに虜はれず、淡々と行ける人は心が出来た人だと思ふ。園兒の母親にさうした人が一人ある。美人でなくても心から滲み出た床しさが一番懐しく思はれる。

短歌草原三月号、隨筆。

築紫野春草氏　歌集「雲霧」より抄出

朝雲もうひうひしけれど夕雲の山の端にゐるそのしづけさや

意に任せゆきとどまらぬ雲といへど雲には雲の定業(サダメ)あるべし

行く雲のあともとどめぬすがしさを願ひて久しわが日ぐらしに

わく雲の濃きもうすきもおもむろにうつろひゆきて後なき清しさ

（法信抄）

鳥取県用瀬　辛川忠雄

合掌　なすきゆうりあれも　これもと　苗植へて

初夏の夕を　生きてたのしき

今朝、私は高一の娘に仏様のお花をあげさせて『仏様にあげるのではないナアー矢張り、自己にお花をあげるのだ……』などと語り合いました。

愛知県　故・中井丘造

『歎異抄』渇仰

先生、ドウカオ話シテ下サイ　何度モ　何度モ　繰リ返シ繰リ返シ　同ジ　トコロヲ　『慈悲ニ聖道浄土ノカハリメアリ』ト

先生、モウ一度　オ話シテ下サイ　同ジトコロヲ　繰リ返シテ　何度聞イテモ厭カレマセン　『善人ナホモテ往生スイハンヤ悪人ヲヤ』ト

先生、幾度モ　幾度モ　オ話シテ下サイ　ホントニ歎異ノコトバハ　スバラシイデスネ　コンナニ深イ世界観ガホカニアラウトハ思ハレマセン　『泣ク泣ク筆ヲソメシナリ、外見アルベカラズ』ト

不安デ　不安デ　タマラヌトキ　『地獄一定』ノコトバハ安心デスネ。　オソロシクテ　オソロシクテ　タマラヌトキ『悪人正機』ノコトバハ　慈悲デスネ。　クルシクテ　クルシクテ　タマラヌトキ　『柔和忍辱』ノコトバハ　慰メデスネ

世ノ中ノ一切ノ問題ヲ　己ノ問題トシテ　世界ノ平和ヲアガナハウト云フ　歎異ノココロハ　怖シイマデノ眞実デスネモウ一度、ソシテ何度モ　何度モ　ドウカ　先生、オ話シテ下サイ　『慈悲ニ聖道、浄土ノカハリメアリ』ト。

編者註。医大御卒業後、療養ヲ続ケラレシモ、遂ニ逝カル。

○　盛岡市　金田一富代

私は本年六十一歳になりました。十四年に長女を女学校二年で失ひ、十七年に主人に先立たれ、廿年には主人の母を見送り、あとに二人の娘がありましたが、挺身隊の仕事で弱い身体に無理を致しまして、十八歳と廿三歳とで相次いで敗戦後に逝き、いよ〳〵私一人になりました。当時は生きる力も御座いませんでしたが、一年後に始めてこの有難い教を伺ふことの幸を知り、先立つた娘達は身をもつてそれを教へてくれました。

今度は清水スノ様から「オネガヒダカラスグキテオクレョ」の池山先生の色紙を頂き、有難さにむせびました。早速御仏間に掲げ朝夕御呼び声を聞かせて頂いて居ります云云。

○　岡山県　西本清三

私の恩師、菅瀬芳英先生が「如来所以興出世唯説弥陀本願海」ということは、人生の目的は弥陀の本願を聞くと言うことであるとよく云はれましたことを想ひ出して居ります。云云。

○　岡山市　藤原隆

今しも軒の青葉に五月雨か音もなくかゝりまして清新の気のただよふ静かな昼で御座います。

待望の池山先生の『仏と人』が此程手許に届きましたので、先ず劈頭の「大いなる受入」を拝読いたし、法然上人親鸞聖人、池山先生、それ〴〵に御あざやかな御受入に、今更驚嘆、ひれ伏しておがみました、そして自分を反省させられて居ります折しも、義山法語を御惠与たまはりましたので急いでむさぼる様に開きました。第一老眼にも読み易く、深遠なる御信心を極めて単的にお示し頂き、覚えず一気に読み終へました。往生の要諦、南無阿弥陀仏のほかになき事をしかと承りました。誠に心強い事で御座います。云云。

編集後記

麦秋もすぎ田植の一番お忙しい頃に六月号がおとどけ出来ることでせう。去る五月二十日には駒沢大学の東元慶喜（多郎）さんが三年間のビルマ留学僧として羽田を出発せられました。暁の大空かけりラーマンニヤおもむくときぞみのりしたひて、と詠じて元気に旅立たれました由であります。

又東京の稲津紀三さんが、生れ変られたやうな健康さで来庵下さいまして太子精神の奉戴を提唱されつつ、四天王寺やら北陸の地やらを奔走せられた由であります。

京都の西元宗助さんから同和問題といふ近著を頂きました。凡人の求道、念仏者の人生観、等々、ソ聯から帰国せられて以来もり〳〵と活動し著作して下さつて居ります。

更に兵庫の新知事、坂本さんから「市長の手帳」を頂きました。今度は「知事の手帳」も時と共に出来上ることでありませう。福島先生と御縁の深い方で、仏典に深く親しまれ、写経もせられてゐるとの由であります。

山田宰さんから、独文歎異抄と独訳信仰之余瀝をスプランガー氏に送呈したら、非常によろこばれ「何と大きな喜びを貴方はこの贈物で私にもたらして下されたことか。仏教の本質に於けるこの様な深い洞察と、此等の本における様に深い敬虔とを人間性に於て見ることが出来たのは稀有なことでありました云々」

との丁重な礼状を受け取られた由であります。

――○――

△「あゆみの跡」を冠頭に提げて故・臼杵老師の遺徳を讃仰させて頂きました。

△「如来出世の本意」は、蓮如上人が非常に渇仰せられた正信偈の四句を、新しく感佩いたしました。

△「へだてのやまぬものをこそ」は、廿四、五年も前に、京都で池山先生から承つてゐた「継母」と云ふ題の随筆について、すこし感想を加へて誌しました。廿余年間心のうちで温めたものであります。

△「歌心そのをり〳〵」は柳瀬様の歌のいのちの淵源をあらはに、表白して下さつたもの二つと、随筆も加へて三篇いただきました。生活即信仰即芸術とないられてゐる面影をことに感銘深く拝読いたしました。

東京都渋谷区代々木町七三一が御住所であります。

御案内

毎月一、二、三、日曜　午後一時半
日曜講話。
一道会館

毎月廿四日午前、午後。
法話会。
昭和区小櫻町教西寺

六月二十六日・日曜午前十時。岡崎市中町東別院、同朋会館。
歎異鈔讃仰。（第一章）

定価　一部　十七円（送共）
半年　百円（送共）
一年　二百円（送共）
名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二
印刷人　奥川正生
名古屋市南区駈上町二ノ二八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光　第七巻　第六号　昭和三十年六月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可